

受 賞 者 紹 介

(推薦調書より抜粋)

<担い手育成部門>

吉 野 隆 子

夏 目 安 勝

<技術改善部門>

鋤柄農機株式会社

<農業・農村振興部門>

鈴 木 明

担い手育成部門



名古屋市

よし の たか こ
吉 野 隆 子

吉野隆子氏は、名古屋市の「都市公園オアシス 21」での農産物直売所の開設に関わったことを契機に、名古屋市の中心部で有機農産物の情報発信を目指して奔走し、平成 16 年に「オアシス 21 オーガニックファーマーズ朝市村（以下、朝市村）」を設立し、村長に就任してリーダーシップを取り、今日までその運営を支えています。朝市村は「点在する有機農業者の交流の場」として、また「有機農業者と消費者のマッチングの場」として活動を始め、さらに「年間通じた定期開催」を実現することで有機農産物の認知度向上を図り、参加している有機農業者に安定した販路を提供することに貢献してきました。

平成 21 年から有機農業を志す者への窓口として朝市村に「就農相談コーナー」を創設し、多くの就農相談に携わる中で、これまでに築いてきた有機農業者との信頼関係から「先進有機農業者への研修体制」を構築し、就農相談コーナーに訪れる相談者に対して、希望する就農地や栽培品目に応じた研修受入農家を提示しています。これにより先進有機農業者と新規参入希望者との結びつきを強くし、有機農業への取組姿勢の伝承、栽培技術の習得促進が効果的に取り組めるようにしています。また、有機農業に参入する際の課題である生産物の販路についても、オアシス 21 以外にも販売場所を確保して新規の有機農業者に提供を図っています。さらに、青年就農等給付金制度、制度資金や農地確保等について関係機関との連携強化にも尽力し、これまでに 27 名が新規就農し、現在 10 名の就農予定者が研修を受けており、有機農業者の参入から定着まで多方面からの支援に中心的な役割を果たしています。

これまでに吉野氏が朝市村のある都市部と農業者が営農している地域を繋げてきたことにより、①農業体験に訪れ有機農業者に関心を持つ人の増加、②中山間地域や都市隣接地域の耕作放棄地の減少、③新規就農者の増加、④過疎地域への定住促進による活性化、など、さまざまな成果が生まれています。

このように、朝市村の運営に尽力する中で、有機農業者の新規参入から定着までを効果的に支援する体制を構築し、県農林水産事務所や市町とも連携強化を図り、意欲ある若手有機農業者の育成に精力的に取り組まれています。また、有機農業を通じて農業理解の促進や地域の活性化にも大きく貢献しています。

担い手育成部門



新城市

なつ め やす かつ
夏 目 安 勝

夏目安勝氏は、昭和51年から教諭として愛知県立新城高等学校、猿投農林高等学校、安城農林高等学校に勤務し、生徒に「将来自分の経営に取り入れたい品目の調査研究」を課題に与えて常に「考える農業経営の実践」を指導するとともに、地元で若手農業者に特産品の栽培指導を行うなど新城地域の農業を担う人材の育成に尽力しています。

教諭時には、農業後継者ではなく農業経営者となるために「考える農業経営の実践」を指導し、将来の農業経営に役立つ地域農家への宿泊現場実習、草花複合環境制御温室の竣工等、農業経営者の育成に精力的に取り組みました。

教頭時には、平成17年度から始まったJA愛知東「こども農学校」に全面的に協力し、生徒を指導役で派遣しては生徒自身に農業の意義や魅力を感じ取らせる教育を行うとともに、次世代の農業を担う子供達（小学校3年生から6年生）が農業への興味関心を高め、この地域の農業者を志すよう長年、公私にわたり支援してきました。現在までに「こども農学校」の卒業生5名が、新城高等学校に入学・卒業後、就農しています。

校長時には、新城高等学校において、中山間地農業の小規模な経営基盤を安定させる手段の一つとして農業の6次産業化を推進するために、食品製造に係る施設・設備の充実、びん詰缶詰営業許可の取得による加工販売技術の指導に尽力してきました。

また、地元農業の生産振興を図るため、昭和51年から新城地域の特産品としてジネンジョと夏キャベツの栽培を自ら実践し、新城地域の農業後継者に対して地元農家と協力した調査研究の成果をもとに技術指導を継続的に行って、地域の農業者育成と生産振興に貢献してきました。

退職後は、愛知県立農業大学校で臨時講師として勤務していますが、新城地域の農家や研修グループからの指導依頼も多くあり、親身になり現場指導に努めて、地域農業の発展に現在も取り組んでいます。

技術改善部門



岡崎市

すきがらのうきかぶしがいしゃ
鋤柄農機株式会社

鋤柄農機株式会社は、天保6年に創業し、明治用水開削後に鍛冶として農具を打ち始めて、昭和36年に法人化し、動力農機の作業機開発を主力としてマルチャー・畦成形機等を開発しトップシェアを維持しています。

愛知県農業総合試験場（以下、愛知県農総試）が開発した不耕起V溝直播栽培技術（以下、V溝直播技術）の実用化・安定化に向けた試験に積極的に協力しました。同社が不耕起V溝直播機の中核要素である作溝輪の量産化に向けた改良や関連作業機の開発に努力を重ねた結果、愛知県のV溝直播技術による作付面積は平成28年で2,350haまでに広がっています。

また、同社のV溝直播機の出荷台数は、平成28年度累計で県内162台（全国390台）と、V溝直播技術は水稻の直播栽培として全国的にトップクラスの普及実績になっています。

不耕起V溝直播栽培のメリットは、育苗・田植作業の省略、作業効率の高い直播作業による労働時間の削減と農作業の分散化であり、水稻栽培における労働時間は先進的な大規模経営体を対象とした事例調査で30%以上の削減を実現しています。このようなメリットを活かして水稻作の担い手農家は、直播栽培と移植栽培を合理的に組み合わせ、栽培面積の拡大を図っています。

野菜産地である東三河地域においては、キャベツ生産農家の意見要望を取り入れて、従来型より地域にマッチした畦成形機の開発に努力するなど、地域に密着した作業機の研究開発を行い、新しい生産技術の実用化に取り組んでいます。

このように、愛知県農総試や県内農家とのコラボレーションによる研究開発に取り組み、愛知県農業の生産力アップおよび産地振興に貢献しています。

農業・農村振興部門



小牧市

すず き
鈴木

あきら
明

鈴木明氏は、昭和34年に就農して以来、57年の長きにわたりモモ専作農家として、小牧のモモ生産部会活動の充実を図り、部会員の栽培技術や所得の向上にリーダーシップを発揮してきました。

地域に合った優良品種の導入を積極的に行い、自らが地域に合った品種を見極めて良い系統を選抜し、部会への普及推進を行った日川白鳳は現在でも基幹品種として栽培されています。

栽培技術においては、現在主流となっている二本主枝整枝法の導入にあたって自ら試作し、栽培管理面での有効性を確認して、部会員への栽培技術の普及推進を行ってきました。

現在も年5回の研究会においても自らのほ場や技術を惜しみなく提供し、部会員の相談を受けるなど、部会全体のレベルアップに取り組んでいます。

販売面では、市場販売において段ボールによる出荷方法の改善、都市近郊を活かした産直・庭先販売等の直売への取組を率先垂範しています。

また、廃棄していた幼果を地元和洋菓子店に出荷する仕組みを作り上げて、農家所得の向上に繋げています。

さらに、モモ生産者の高齢化対策として、地元住民を募集したモモ栽培サポーターの育成指導に熱心に取り組み、モモ産地を支える人材育成と地域農業の活性化に貢献しています。

このように、地域の農業・農村振興に大きく貢献しており、部会員への技術指導やモモ栽培サポーター作りに現在も尽力しています。